

令和5年度運営諮問会議 議事概要

1. 日 時 令和6年1月23日（火） 13時30分～15時10分

2. 会 場 宇部工業高等専門学校 大会議室（管理棟3階）

3. 出席者

○運営諮問会議委員（五十音順） 3名

川 村 宗 弘 委員

森 田 成 寿 委員

山 田 陽 一 委員

○宇部工業高等専門学校教職員 18名

金 寺 登 校長

内 堀 晃 彦 副校長

仙 波 伸 也 校長補佐（教務主事）

藤 田 活 秀 校長補佐（学生主事）

荒 川 正 幹 校長補佐（寮務主事）

三 戸 毅 啓 校長補佐（事務部長）

岡 本 昌 幸 専攻科長

森 崎 哲 也 機械工学科長

春 山 和 男 電気工学科長

久保田 良輔 制御情報工学科長

兼 地域共同テクノセンター長

杉 本 憲 司 物質工学科長

田 川 晋 也 経営情報学科長

池 田 晶 一般科（文系）科長

伊 藤 耕 作 一般科（理系）科長

城 戸 秀 樹 機関評価室長

一 田 啓 介 キャリア支援室長

伊 世 康 宏 総務課長

穂 枝 澄 学生課長

（陪席） 総務課課長補佐 総務係

4. 日 程

13 時 30 分 開 会

校長挨拶

出席者紹介（本校側は、座席表に代えることで省略）

資料の確認

議 事

一、議長選出

二、議長挨拶

三、議題

13 時 40 分 議題 1 ○宇部高専の教育活動等に関する総合評価

14 時 30 分 議題 2 ○ベトナムへの国際協力事業／学生支援センターの設置／
アントレプレナーシップ教育の展開について

15 時 05 分 議長挨拶

校長謝辞

15 時 10 分 閉 会

5. 配付資料

○令和 5 年度運営諮問会議開催要領

○運営諮問会議委員名簿

○令和 5 年度運営諮問会議座席表

○宇部工業高等専門学校運営諮問会議規則

○議題 資料 1：宇部高専の教育活動等に関する総合評価

資料 2：ベトナムへの国際協力事業／学生支援センターの設置／
アントレプレナーシップ教育の展開について

○令和 5 年度宇部工業高等専門学校学校要覧

○令和 5 年度宇部高専学校案内

○令和 5 年度宇部工業高等専門学校年度計画

○令和 5 年度宇部工業高等専門学校いじめ防止プログラム（年間計画）

○令和 5 年 1 月～令和 5 年 12 月 宇部工業高等専門学校の動き

○その他

学校だより（106 号 2023 年 12 月）

地域共同テクノセンター News&Reports 第 34 号（2022 年度事業報告書）

(1) 開 会

総務課長の進行により、運営諮問会議が開会された。

(2) 校長挨拶

本日は、お忙しいところお越しくださいまして、誠にありがとうございます。皆様方には、日頃より本校を御支援くださいまして、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの感染法上の位置づけが、昨年5月8日より5類に変わりまして、それに伴いまして、本校におきましても対面での活動というのが非常に多くなってまいりました。これによって、クラスマッチや高専祭等が、大いに盛り上がりました。



特に印象に残っておりますのは、学生たちの活躍や、OB・OGの応援、本校には、テックアンドビジネスコラボレイトという組織がございまして、地域の方々の応援が非常にありがたいというふうに感じております。

中国地区の高専体育大会におきましては、公式野球、サッカー、バドミントンなど、多くの競技で優秀な成績を収めることができました。全国大会におきましても、公式テニスの女子ダブルスで優勝するなど、学生たちがとても活躍してくれています。

夏休みには、60名の学生が海外留学をしております。発表会で成果を報告、披露してくれました。彼ら、彼女たちは、得がたい貴重な経験を体験して、参加した学生たちの成長をととてもまぶしく感じました。3月にも17名の学生が、また海外留学を予定しております。

本校には現在11名の長期の留学生がおります。また、前期は15名、後期は16名の、1か月から3か月程度の短期留学生もおります。そのような留学生たちと本校の学生たちが日々交流をし、オンキャンパスでの国際交流も盛んにさせていただいております。

地域企業の皆様からの応援も大変ありがたくて、テックアンドビジネスコラボレイトや地域共同テクノセンターを中心に、インターンシップ、テクノフェア、U-16プロコンなど、いろんな場面でお世話になっております。誠にありがとうございます。

本校としましても、教育改革として、昨年度に引き続き今年度も、カリキュラム改革、カリキュラム検討などを、DXを中心に進めております。

本日は、議題にもございますように、1つ目の議題としまして、宇部高専の教育活動等に関する総合的な評価、2つ目の議題としまして、ベトナムへの国際協力事業、それから、学生支援センターの設置、アントレプレナーシップ教育の展開を中心に、御審議いただければと思っております。

皆様方からの忌憚のない御意見をどうぞよろしくお願い申し上げます。

(3) 出席者紹介、資料の確認

総務課長から、本日出席の運営諮問会議委員と本校教職員が紹介された。

引き続き、配付資料の確認が行われた。

(4) 議長の選出

総務課長の進行により、本会議の議長として山田委員が選出された。

(5) 議長挨拶

ただいま議長に選出していただきました山口大学工学部の山田と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

皆様御承知のとおり、宇部高専さんは昨年度、創立60周年をお迎えになられました。高専制度が始まって60年たったということでございます。人間で言いますと還暦を迎えて、1周回って今年から第2周目をスタートしたということかと思います。

昨年度も同じことを申し上げたかもしれませんが、昨年、この高専が60周年を迎えられたときに、高専機構の理事長の谷口先生がおっしゃったのが、これまで高専60年の歴史が

あって、今、高専「KOSEN」というのは、世界的に認知されて、日本独特のこの高専という教育システムが、東南アジアや中央アジアへ輸出されるという時代となり、かなり高専という教育システムが世界的に認知されてきたということをお話しされたと同時に、「これから数年間で高専が変わらないと、60年後の高専はない」と、かなり厳しいことをおっしゃったので、非常に強く印象を持って伺っておりました。

昨今、情報通信関連技術の急速な進展によって、産業構造や分野、社会の仕組みが大きく変わっています。そうなってくると、世の中が求める人材像、高専や大学が輩出すべき人材像も大きく転換が迫られてきているということを痛感しております。

そういう時代の中で、高等教育機関はどう変わっていくのかということを、我々自身も考えていかなければいけません。今日は高専さんの取組を参考にさせていただきながら、我々工学部の取組というものも考えていきたいというふうに、勉強しに参りましたので、本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。



(6) 議 事

(山田議長)

それでは、お手元の運営諮問会議開催要領に基づきまして、議事を進めさせていただきます。

この会議の職務は、運営諮問会議規則によりますと、宇部高専の教育研究活動や運営に関する重要事項を審議し、校長に対して助言を行うこととなっております。各委員におかれましては、宇部高専に対しての御助言、御意見等を御自由にお聞かせ願いたいと思います。

本会議の進行形式といたしましては、初めに宇部高専側から議題について説明していただき、その後、意見交換をお願いいたします。

それでは、早速、議題に入りたいと存じます。

まず、本日の議題1、宇部高専の教育活動等に関する総合評価について、機関評価室長の城戸先生から、御説明をよろしくお願いいたします。

(城戸機関評価室長)

ありがとうございます。機関評価室長の城戸です。よろしくお願いします。

私からは、宇部高専の教育活動等に関する総合評価について、まず説明させていただきます。

お手元の資料の1-1と1-2が、対応しております。1-1がまとめたものです。1-2に、190の点検項目が記載されています。

昨年度説明させていただきに、「ハラスメントや多様性への配慮について、点検項目に入っていないが、導入をどうお考えですか」という御意見を頂きましたので、それにお答えして、今年度の自己点検評価について説明させていただきます。

機関評価室の中でも検討しましたが、ハラスメントや多様性が起こった案件ごとに、ハラスメント防止委員会や学生委員会等で適切に対応しているところです。ハラスメントや多様性への配慮については、その案件ごとに対応すべきものであり、また、プライバシーに関わるものがあるため、どのように点検項目に追加するか、今後の社会状況の変化等を注視しながら、今後も検討を続けていきたいと考えています。

いじめにつきましては、既に点検項目に入れており、今年S評価になっている項目もありますので、後程説明させていただきます。

では、令和5年度宇部工業高等専門学校自己点検・評価につきまして説明させていただきます。

5年度が終わっておりませんので、前期終了した時点に、10月から11月にかけて各部署で自己点検をお願いし、機関評価室にて取りまとめたものを提示しております。

特筆すべきものを「S：特に優れている」とするところは、昨年度から導入しまして、各部署に力を入れているところはS評価で提出するよう依頼したところ、今年は190項目のうち12項目で提出されましたので、それを今から説明させていただこうと思います。

また、去年まではB評価で提示していたもののうち、年度末まで実施するとAになる予定ものは、今年は「(A)」、「見込みのA」として表示しております。その結果、B、Cがなく、基本A、(A)とS、あと該当なしの評価になっております。

なお、昨年度、令和4年度の点検、昨年度の諮問会議でいただいたものは、今年度の4月に確定し、6月にホームページ上に公表しております。

こちら資料1-2です。

各基準が1から10までございまして、190項目全て説明するのは、時間もございませんので、代表的なものをピックアップし、資料1-1にまとめてありますものを説明させていただきます。

基準1につきましては26点検項目ありまして、Aと、(A)評価が26項目でしたので、良好であると判断いたしました。

また、3つの方針につきましては、令和4年度に、5年に1回の修了生、卒業生、あと就職した企業様向けに、宇部高専の教育に関するアンケートを実施いたしました。その回答結果を踏まえて、新教育課程検討ワーキングを実施し、その後に進言して、検討をしているという形になっています。

基準2、教育組織及び教員・教育支援者等につきましては、これは11項目中、S評価が1項目で、Aと(A)評価が10項目でしたので、良好であると判断いたしました。

教育効果につきましては、後ほど仙波のほうから説明がありますが、アントレプレナーシップ教育の導入効果について、教員FDを実施して、その結果を今、確認しているというところです。

また、S評価で出てきたものが、2-1です。この2-1、学科・専攻の構成は適切であるかという項目で、学科・専攻の構成については、高度化推進に向けて改組を検討しているので、ここは



S評価をしております。他の項目は、また時間があるときにご覧ください。

続きまして、基準3、学習環境及び学生支援等についてです。ここは41項目、点検項目がありまして、そのうちS評価が6項目、A評価が35項目ですので、良好であると判断しております。

S評価となっているのが、まず3-10。ICT環境のセキュリティー管理体制は適切に機能しているかというところで、状況に応じて適宜、会議を開催して、セキュリティーに関して検討して運用しています。

次に3-20。障害のある学生に対する教育上のガイダンスを実施しているかという項目で、障害のある学生に対して面談を実施するとともに、入学時に提出する健康調査票に記載のあった学生や、出身中学から障害に関して連絡があった学生に、修学支援に関する説明を行っております。その必要に応じて、保護者についても面談を実施しています。

また、オープンキャンパス等で、プライバシーに配慮した個別ブースを設けて、参加者の個別相談に対応し、入学後の修学支援の流れについて説明も行っております。

3つ目が、3-26。キャリア相談室・支援室は有効に機能しているかという項目です。

ここは前期9月までの数字になりますが、教育コーディネーターが対応した学生のキャリア相談件数が88件、人数として43名でした。その利用状況を数値化して、各学科に随時発信し、採用試験に関わる資料提供を適切に行うなど、コロナ禍を経て大きく変化する就職活動へ対応を進めたことにより、コロナ禍の中でも早期の採用内定獲得に寄与できたため、S評価にしております。

4つ目が、3-27。修学支援は適切に機能しているかという項目ですが、修学支援室にて対象学生のウォッチリストを作成するとともに、個人情報に留意しながら当該リストを活用して、運営委員会や各学科に訪問して情報共有を図り、学内で連携して、学生の支援や見守りを行っております。今年度からは、そのリストをOne Driveのほうで学生支援センター員や学生課と共有して、支援体制を強化いたしました。

学生支援センターにて支援プロセスを明確化して、学内での連携体制の整備を行ったため、S評価です。

5つ目の3-38は、学生寮は勉学の間として有効に機能しているかという項目です。学生寮で週に1回程度、低学年生を対象とした勉強会を実施しているという項目がS評価にしております。

最後の3-40は、これは新たに追加した項目です。いじめ防止対策のために体制が整備されているかという項目で、今年度初回のいじめ対策委員会にて、委員会の役割及びいじめ防止プログラムについて、委員間における認識を共有いたしました。

学生間トラブルの事案発生時には、学生支援センターと連携して、情報の把握を行い、委員会には学級担任が陪席して、学校としての当該学生への関わり方をその都度審議している体制のため、S評価となっております。

基準4、これは財務基盤及び管理運営に関する項目が32項目ありまして、S評価が1つ、A評価が31でしたので、良好であると判断しております。

収支に関わる方針につき、計画が適切なプロセスで決定されているかという項目がS評価でした。5月及び10月に予算委員会を開催して、戦略的かつ計画的な予算管理を目的とした配分を行っています。

また、光熱水料の高騰など厳しい財政状況を踏まえて、今年度は現行予算方針の抜本的な見直しを図るべく、中堅・若手教職員で構成するワーキンググループを設置し、今後の予算方針、増収及び支出削減を検討しています。そのワーキンググループから答申が来まして、それを基に予算委員会で新たな予算方針を検討することからS評価としております。

基準5、準学士課程の教育課程・教育方法についてです。ここは24項目ありまして、S評価としたものが2項目、A評価だったものが22項目でしたので、ここも良好であると判断しております。

S評価だったのが、5-1、カリキュラムポリシーに照らして、授業科目の配置が適切であるかという項目で、数理・データサイエンス・AI申請のために、カリキュラムポリシーの点検を行い

ました。

また、5—6、学生の多様なニーズ、学術の発展の動向、社会からの要請などを踏まえた、教育課程における配慮がされているかという項目で、アントレプレナーシップ教育の導入を推進して、プロジェクト学習に7つのアントレ課題を設定して実践しました。

さらに、宇部市高校生ビジネスプランコンテストに3グループがエントリーして、最優秀賞と特別賞を受賞できました。教員向けに対しましては、アントレプレナーシップ教育FDを開催して、教員の理解を深めました。次年度以降、アントレプレナーシップ教育を拡充する計画を策定しているところで、Sとしております。

基準6、これは入試に関わることです。準学士課程の学生の受入れにつきまして、7項目があります。6—7入学定員に対し入学者数が大幅に不足又は超過した場合に改善の取り組みがなされているかという項目は、この状況が発生しておりませんので、該当なしであります。

それ以外は、A評価です。まだ学力試験は実施していませんので、見込みの(A)評価が幾つかありますが、実施すれば、A評価が6項目となるので、これは良好であると判断しています。

基準7、準学士課程の学習・教育の成果という項目。これはアンケートで判断しております。見込みAが8つですので、今後予定通り実施すると良好となると判断しました。

宇部高専の教育に関するアンケートの回答結果によって、新教育課程検討ワーキングによって指摘された点があり、協議・検討していくということでA評価としています。

基準8は、専攻科に関する点検項目になります。33項目あります。

S評価が1項目、A評価が31項目。そして、社会人入試が今年実施されなかったため、該当なしが1項目ございまして、全体としては良好であると判断しております。

今年度の就職率・進学率が、10月末現在のデータによると98%と96%となっており、高い就職率・進学率を維持しているのも、今のところ学校の学習・教育の成果は認められていると判断しています。

S評価は8—2。専攻科の教育課程が準学士課程の教育と連携し、発展した構成になっております。今年度4月に入学した者は、本科5年間新カリキュラムを受けた者が入学したので、それに対応した専攻科新カリキュラムを実施しているということで、S評価という判断をしております。

基準9、研究活動の状況につきましては、ここは4項目、全てA評価になっておりますので、良好であると判断しております。ここは毎年、定期的に、この研究活動の成果を地域共同テクノセンターのNews & Reportで公表しております。

基準10、地域貢献活動等に関する状況につきましては、1項目がS評価、3項目がA評価であるため、良好であると判断しました。その成果は、地域共同テクノセンターのNews & Reportsのほうに公表しております。

S評価になったものは、10—3、地域貢献活動は十分に行われているかという項目で、U—16プロコン山口大会及び事前講習会を実施し、参加者、協賛企業が増加しており、テクノカフェの回数も増加しているので、S評価としております。

駆け足になりましたが、私のほうからの御説明は以上です。話していない項目もありますので御覧いただいて、御意見、コメント等いただければ、幸いです。

(山田議長)

どうも御説明ありがとうございました。

本日の議題の1、宇部高専の教育活動等に関する総合評価について、委員の方々、御質問、御意見ございましたら、お願いしたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

それでは、私のほうから幾つか、お伺いさせていただきます。

まず、基準の2のところで、教育組織及び教員・教育支援者等というところで御説明の中で、学科・専攻の構成について、高度化推進に向けて改組について検討したという記載がございますけれども、これは具体的にどういう改組を御検討されたか、お伺いしてよろしいでしょうか。

(仙波教務主事)

教務主事の仙波でございます。

改組につきましては、最初は、昨年度も御紹介させていただきましたけれども、カリキュラムが5年間で1周回りましたので、今の情勢に合わせて、少しカリキュラムを見直したいという思いがございました。最近、やはり情報化教育というのが非常に注目されており、文部科学省のほうの支援としまして、機能強化事業というのがございます。この支援を受け、今後10年かけて情報化教育を強化していくと本校も決意しました。

まだ決定はしていないところですが、電気工学科に改組予定がございます。情報強化し、情報を軸においた電気システム工学科とする予定です。また、機械工学科と物質工学科が情報コースを内部に設置する予定です。制御情報工学科は、もともと情報がありますので、それを強化する予定です。同じく経営情報学科につきましても、情報を強化していくということで、全学で情報教育を強化するという方向に決めました。

(山田議長)

ありがとうございます。高度情報人材育成に関しましては、工学部の関連教員と宇部高専様といろいろ協議を進めていただいております。いろいろなお世話になっておりますけれども、どうぞよろしくお願い申し上げます。

できるだけ一緒の取組として申請をしたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それから、私のほうから、しばらく続けてよろしいですか。

基準4の財務基盤及び管理運営のところ、最近どこも予算について非常に厳しい状況にあります。その中で、現行予算方針の抜本的な見直しを図るべく、若手の教員、中堅若手教職員で構成するワーキングでいろいろ御検討されたということですが、何かいいアイデアが出ているか御教示いただけないでしょうか。

(内堀副校長)

抜本的な改革はなかなか難しいです。

考え方として、お金を取るか時間を取るかということが議題になっているように感じます。少し前に、中間答申が出てきましたが、文科省や機構本部から各種プロジェクトが降りてくるのですが、それは本当にリーズナブルかという問いかけが、私たちマネジメント層に投げかけられていると感じます。

要するに、予算を取るために仕事を増やすということが、本当に必要なのか。教育機関として、本当にそれが正しいことなのかということが問いかけられていると感じています。

こちらとしても、考える一つの軸が新しくできたと考えています。

(山田議長)

ありがとうございます。なかなか答えるのは難しい問いかけですね。

あと2点ございます。基準5の、準学士課程の教育課程・教育方法のところ、

いわゆる、アントレプレナーシップ教育を拡充していくということで、なかなか日本の風土の中で、アントレプレナーというのは非常に難しいなど、私たちも感じているところです。

実際に、アントレプレナー教育の導入を推進されるに当たって、学生さんの反応を、分かる範囲で御教示いただければと思います。

(仙波教務主事)

ありがとうございます。後ほど、またスライドを使って、詳細は紹介をさせていただきたいと思っています。

起業したいなという学生は、現時点では少ないですけど、いるようです。

今回、学生に対する講習会もしまして、頭の中に起業家になるという意識は、非常に少なかったようです。講習会をして、「自分たちに起業ということも可能性がある」ということを、理解したようです。

今から起業するといっても簡単ではないので、起業するために何が必要なのかということを、今から考え、あるいは挑戦し、最終的には、卒業までにという思いもあります。また、将来的に一度社会に出てから、再度起業するといった道を選択する学生も出て欲しいという思いで、進めています。

そのためにも、やはり起業とはどういうことかというのを、教育の中に埋め込んでいきたいという思いで、計画を進めているところです。

(山田議長)

ありがとうございました。

最後ですが、基準8の専攻科過程の教育活動ということで、就職のことですけど、非常に高い就職率ということだと思いますが、学生さんの就職先として、いわゆる県内定着率という言葉をよく我々にもつきつけられます。就職される方のうち、県内就職は大体何%ぐらいかお分かりでしょうか。

(一田キャリア支援室長)

キャリア支援室の一田です。お答えさせていただきます。

令和5年度12月末時点での内容を、こちらの手持ち資料のほうで御説明させていただきます。

現在、本科と専攻科合わせて就職が決定している学生数141名おまして、その中で、県内就職の学生が現在26名、県外就職の学生が115名となっております。パーセンテージとしましては、県内就職が19.8%、県外就職が80.2%という形で、現在のところ、2割の学生が県内就職となっております。

(山田議長)

山口県の中でも、「高等教育機関の卒業生・修了生の県内就職をできるだけ進めてください」と、COC+の一連の動きもありましたが、積極的に県内就職を進めておられるのか、それとも、もう全て学生の自由意思に任せておられるのか、その辺の御事情というのはいかがでしょうか。

(内堀副校長)

基本的には、学生の自由意思です。ただ、本校は県内出身の学生がほとんどです。それにもかかわらず県外就職が80%という数字は、あまりいいことではないかとも思います。だから、何もしないということでは、許されない、いけないことだなと思いますので、まず、県内企業を知ってもらう機会を増やしております。こういう企業があるからそこに行ってみたいと、学生が感じる機会を増やすため、インターンシップの前に、県内企業の方にインターンシップの事前教育として講話をしていただくなど、合同企業研究会の際には、県内企業と県外企業を分けて、午前中は県内企業だけで展開するといった工夫はしています。

その上で、2割という数字というのは厳しいなとは思いますが、いろいろと企業の方とお話をしながら、キャリア支援室を中心に、全体で取り組んでいるところです。

(金寺校長)

今副校長が申し上げたとおりなのですが、本校としましても、もちろん県内に直接就職するのが望ましいと思いますし、もう少し就職してくれたらなとは思っております。

また、いろいろ外を見てきてから、戻ってきてもらうというのも、大事ななと思っています。今

申し上げたように、まずは地元にはすばらしい企業がいっぱいありますので、そういう企業様をここにいる間に知ってもらおうというのが大事と考えております。

合同企業研究会を今年も12月にやりまして、今年は地元の企業様の枠を広げ、なるべくたくさん紹介する形で実施をしました。

そのような形で、まず地元のいい企業がたくさんあるということを知ってもらい、それから外で修行してきて、また戻ってきてもらうとよいのではないかと考えております。

(山田議長)

御説明ありがとうございました。

私のほうからは以上でございますが、川村委員、よろしくお願いします。

(川村委員)

川村でございます。基準の6について、お聞きしたいと思います。

準学士課程の学生の受入れのことで、おそらく中学生はこれからどんどん減少していくと思われます。徳山高専でも聞いたのですが、徳山高専も非常に今後のことは不安定に思っているということで、特に広島方面から人を集められないだろうかということを検討されているようです。これについて宇部高専独自で対策していることは、何かございますでしょうか。



(仙波教務主事)

ありがとうございます。広報活動には力を入れているというところでございます。徳山高専と大島商船高専の3高専合同で、下関と山口、岩国という3拠点で合同説明会を、実施しております。

それ以外に、宇部高専では、今年度は萩地区と山口地区で、単独で計画しました。ただ、萩地区は、大雨の被害が大きくて、中止になりました。

単独での説明会については、来年も、山口・萩と検討したのですが、やはり本学を見てもらいたいという思いもあり、6月・7月に本校を会場として、学校説明会を実施したいと計画をしております。

早い段階で学生に興味を持ってもらいたいということで、来年度にはこれをオープンキャンパスという形にし、6月・7月のオープンキャンパス開催に向けて、今、計画を進めているところでございます。

(川村委員)

今、実質の競争率はどのぐらいでしょうか。

(仙波教務主事)

今は、推薦と学力で5学科あります。全部平均すると、2倍強になります。

(川村委員)

それは、安心できる数値でしょうか。

(仙波教務主事)

安心は全然できません。今年、若干減っているような雰囲気なので、デジタル化も進めながら、ウェブでの情報展開も含めて今後の広報活動を検討していきたいです。

(川村委員)

やっぱり高専の仕組みがよく分からないという中学生も多いと思いますので、ぜひPRをお願いしたいと思います。

次に、基準9についてお尋ねします。

研究活動についてですが、我々も研究活動をしておりますが、研究の基準というのは、なかなか難しいものがあります。例えば、論文発表が何件、特許が何件等、基準が具体的に示されていないのですが、管理はされているのでしょうか。

(久保田地域共同テクノセンター長)

地域共同テクノセンター長の久保田でございます。

学校全体として、例えば、学術雑誌何本・国際会議何本というのを、数をカウントした公表はしていませんが、地域共同テクノセンターから出しているNews & Reportsの中に、その年度中に出たジャーナルや国際会議が、網羅的に掲載はしておりますので、数自体は集計することは可能です。

学校としてまとめているのは、外部資金と科研とそれ以外の競争的資金を、年度にどのぐらい獲得したのかということころは、数値として持っておりますけれども、その件数として公表はしていません。

(川村委員)

数値目標を定めることなどは検討されないのでしょうか。

(久保田地域共同テクノセンター長)

機構全体として、科研の獲得額や件数は定められてはいますが、現状本校では、定めるところまでは行っておりません。

(岡本専攻科長)

専攻科から少し補足です。明確に何本という基準はございませんが、専攻科生を教育するに当たって、各教員が専攻科生の指導教員となるためには、5年間での研究活動の指標はございまして、それは専攻科で管理はしております。

(金寺校長)

高専におきましては、研究というのは、教育をするために必要という位置づけとなっております。学生に見本を示す意味でも自ら研究をし、また、学生を指導しながら一緒に研究をすすめます。それが目的ですので、件数や金額は、二の次にはなっております。

ただ、指導するに値する基準は、学位授与機構のほうで示されていますので、それを全員が満たすような形では運用させていただいております。

(森田委員)

中学校の関係ですので、やはり、あまり研究などそういったことについて、詳しくはありませんが、幾つか質問をさせていただきます。

まず、資料の中の最初のところで、多様性への配慮等のことですが、御存じのように、大変お恥ずかしながら、宇部市の教員が、12月に報道がありましたように、不正からということで、懲戒免職ということがございました。

こういったことに関して少しお聞きしたいのですが、中学生よりも年齢も上がってくることもあり、いろいろと難しい問題も現場においてあるのではないかと思います。

ハラスメント等において、学生からの相談窓口や、アンケート調査といったものは、定期的にされていらっしゃるのか教えてください。



(藤田学生主事)

資料のほうに、令和5年度宇部高専いじめ防止プログラムの年間計画がございます。

いじめを主体においたアンケートと、心と体の健康調査というのを併せ込んだもので、年に4回実施しております。それを全て共有して、アンケートに気になる記載がございましたら、個別に状況を確認するというのをやっております。

(森田委員)

ありがとうございます。

ちょうどいじめのことも出ましたので、いじめについて伺わせていただきます。

いじめの認知件数ですが、差し支えがなければ、現在把握されている件数をお知らせいただけますでしょうか。

(藤田学生主事)

今年度に関しては、最終的にはいじめではないという結論になりましたけれども、いじめと思われる案件というのは2回ほどございました。いじめ対策委員会の中で調査等をしまして、結果のほうも報告しております。

(森田委員)

ありがとうございます。

少し具体的に、どのようなものであったか、そして、どのように対応されて解決に向かったかを、もしよろしければ、お聞かせ願えないでしょうか。

(藤田学生主事)

1件は、寮生の事案でした。同室の者の、片方の行為がもう一人にとってはすごく負担になっていたということでした。やっているほうではそういう認識がなかったという件でした。

個別に両方とも意見を聞いた結果、いじめには該当しないのではないかとということになりました。

(森田委員)

ありがとうございます。

では、次の質問をさせていただきます。地域貢献についてです。

今、中学校では地域貢献ということで、様々な活動をしております。高専さんが具体的にどのような地域貢献活動をやっているのか、少し御説明願います。

(仙波教務主事)

地域貢献といいますと、非常に幅広く本校も対応しております。例えば、1つ目が、出前授業です。小学校、中学校に向けて、各5学科の専門学科がテーマをお知らせし、小学校、中学校側から受入れの要望がありましたら、そちらに出前授業を行う活動です。これは我々の広報活動にもつながっておりますが、地域貢献の一つという位置づけで、対応させていただいております。

(森田委員)

出前授業は、教員の方が行かれるのでしょうか。

(仙波教務主事)

教員が行う場合もございますが、基本的に本校の学生が全て企画をして、学生が小中学校の皆さんに授業をします。将来的に高専に入ったら、こういうふうな学生になることができるというアピールも含めて実施しております。本校の学生のためという狙いもございます。

(森田委員)

もう一点質問です。今のは学校に行かれています。具体的に、地域に出られて何かされているような活動はございますか。

(久保田地域共同テクノセンター長)

そちらは、私から回答させていただきます。地域共同テクノセンター長の久保田です。

地域共同テクノセンターは、教育研究関係の施設の維持や、その仕組みをつくる部分と、地域貢献活動に対して、管理している部門です。

地域貢献活動につきまして、先ほど、仙波教務主事からのお話がありましたけれども、基本的には学生が主体となっております。その中で、目的とターゲットがある程度ははっきりしているものは、単位認定をする形で教務のほうでやられています。不特定多数の人に向けてやるようなものを、こちらのテクノセンターで管轄しながらやっている形です。

一般向けで、外に出て行ってやる場所に関しては、5月の新川市まつりと、11月の宇部まつり。このあたりは、本当に不特定多数の来場者に対して、特定の学科に持ち回りをお願いしています。2学科が主となり、それぞれの学科の専門性を生かしているようなものを、学生と一緒に参加した人に体験してもらい、お土産でもらって帰っていただけるようなものを企画しております。

それとは別に、「こども科学館 in ときわ」というイベントを、ときわ湖水ホールのレストランがある上のフロアで、8月末ぐらいに宇部市さんと一緒に実施しています。小中学生や、ときわ公園に遊びに来られた幼稚園児でも体験できるようなイベントです。

また、今年だとスポーツコミッションフェスタ等、いろんな外のイベントに教員と学生が出向いて行って、不特定多数の人にいろいろ体験してもらうという活動をしています。

あとは、宇部高専で実施しているのですが、いろんな不特定多数の方からお申込みすれば参加していただける公開講座という地域の人向けの講習も、大体、年に2回から3回ぐらいの企画をしております。これにつきましては、専門学科だけではなくて一般科目の先生も、例えば英語や古文を読む等、いろんな部分で地域の人に体験していただけるようなものを用意しています。

他には、U-16プロコンも宇部高専で実施しています。ここは地域の企業さんも、一緒に巻き

込んでやりたいというところもあります。宇部高専テックアンドビジネスコラボレートという、地域の企業さんたちと宇部高専でつくる地域振興会がございまして、その会長さんにも、このコンテストに参加していただいております。

当日は、企業さんと地元の中学生、小学生にも参加していただいています。講習会の部分は、宇部高専のコンピューター部の学生を中心として、学生が小中学生向けの講習会の講師をしてくれるような実技になっております。このような部分で、地域・企業さんや人同士のつながりをつくっていければよいと考えています。

(森田委員)

ありがとうございます。

本当に、社会貢献、地域貢献において、たくましい高専が育つと思いますので、これからも力を入れていただきたいと思います。

最後ですけれども、これも私の勉強の一つで御質問させていただきたいのですが。

今、教員の労働環境がブラックと言われておりまして、なかなか教員の人気がなく、人が足りないということが、現場では起こっているところでございます。

こういったあたりの人材確保について、それとともに、教員の授業力の向上のための研修システムやそういったところに、どのように人材育成というか取組がされるかを最後に質問させていただいて、私からの質問を終わらせていただきます。

(仙波教務主事)

人材育成としては、FDとして、毎月1回、全教員を対象にFDを行っております。

後ほど紹介しますが、アントレプレナーシップ教育について外部講師の方を招いてお話を頂いています。ハラスメント、学生相談、インターンシップ、キャリア教育について等のテーマで、月に1回のFDは、確実に行っております。

また、本部のほうで若手に向けた研修などもあります。最近ではオンデマンド講習もありますので、そういったオンデマンド講習を受けてもらいながら、各自で自己研さんをしていただいています。

新人については、基本的には各学科の先生がいろいろ相談に乗って、分からないところはいろいろ教えるという体制を築けています。

教員同士の授業参観もして、参観された先生がフィードバックをし、また取りまとめて自己評価するというような、活動も行っております。

(金寺校長)

なかなか教員確保というのは、我々、苦戦はしていますが、ただ、育休等は、きちんと取れるような環境には、日々努力はしないといけません。また、男女比として、女性教員の方も増やしていないといけません。

多々、問題ばかりですが、努力はしたいというふうには思っております。

(山田議長)

御説明ありがとうございました。

それでは、次に、本日の議題の2に移りたいと思います。

ベトナムへの国際協力事業、学生支援センターの設置についてを副校長の内堀先生から、アントレプレナーシップ教育の展開については、校長補佐の仙波先生のほうから、御説明をよろしく願います。

(内堀副校長)

では、始めさせていただきます。副校長の内堀です。

最初に、ベトナムへの国際協力事業ということですが、先ほど、山田先生からあったように、高専機構の理事長が言った、高専制度の輸出です。

どこを対象としているかという、ベトナムです。3校に対して支援をしております。ハノイの近郊にある商工短期大学、COITと呼称しております。あと、フエのほうにあるフエ工業短期大学、それから、ホーチミンにあるカオタン技術短期大学。この3校に対して支援を行っております。

宇部高専が何をやっているかという、まず幹事校として全体の統括をしています。カウンターパートが、商工省や、向こうの政府の組織と、この3つの高専をカウンターパートとして、全体の取りまとめをしています。

物を売るのではなくて、制度を売るということになりますから、端的に言うと向こうの国の法改正が必要になります。カウンターパートから宇部高専となると、なかなか大変な仕事です。ベトナムに7年ぐらい前から行っている先生がおりまして、JICA国際協力機構の関係でベトナムへ行き、そこから始まっていて、政府機関とつながりがありましたので、何とか回っています。

商工省のカウンターパートは文科省じゃないかと、私はと思いますが、なかなか難しい状況で展開がされています。

また、協力支援校という形で、函館、鶴岡、岐阜、有明高専が入って、具体的な支援をしてくれています。

教育制度の輸出といっても、その教育制度って何だということになると、まずはカリキュラムです。これが始まったときに、そもそも高専教育というのは何なのかという話から始まります。中学高校で言うと学習指導要領のようなものとして、高専にはモデルコアカリキュラムがございます。大学では、コアカリキュラムという言葉にあたります。それをベースにし、サブセットですけれども8割ぐらいの内容を含んだ教育の考え方を入れ、また、カリキュラムだけでなく、評価基準も含めます。評価基準とは、その教育目標に対して、どのくらいそれが達成できているかということだけではなくて、その後の改善方法等も含められおり、PDCAを回すというような意味合いも含まれています。

ですので、こちらのカウンターパートはベトナムの学生ではなくて、学校の先生、教員がカウンターになって、教員に対してこのような話をし、学校の制度を整えていく。もしくは、政府機関に働きかけて法整備をしていくという形になっています。

それから、産官学で連携をして、特に出口・就職先に関する協力みたいなものを、産業界のほうからも取り付けるような仕組みをつくっています。最近、卒業生が出始めましたので、ここ1年特に力を入れているところです。

プロジェクトとしては、今年度で終了になります。けれども、ただCOITのほうは卒業生がまだ出ていません。2026年に初めて卒業生が出るような段階です。

機構としてプロジェクト終了し、今後も予算が必要となるのですが、あと二、三年は協力をしながら、向こうの学校だけで教育カリキュラムを組み、それを改善していく動きと、卒業生を企業に就職させる動きができるよう、独り立ちできるようにやっていく方針です。

ちなみに、このような制度は、タイとモンゴルに対しても、ほかの高専がやっています。それから、タイにはもう一つ高専を造るというプロジェクトも動いていまして、それもまた別のところでやっています。それを併せて、理事長は高専制度の輸出と言っていると考えています。こちらに関



しては以上です。

次はがらっと話は変わり、学生支援センターの設置です。

教育に関する教務部、学生生活に関する学生部、寮に関する寮務部があります。これが高専の昔ながらの学生支援体制でしたが、最近、できた順番で言うと、学生の各種相談やメンタルケアに関する学生相談の部門、次に、進路支援、文科省がインターンシップを強力に推し始めた時期に、「キャリア教育をしなさい」というのがありまして、その少し前ぐらいにキャリア支援室ができています。

それから、合理的配慮があります。これが義務になる数年前から、それを見据えて、修学支援室ができています。この前には書いていませんが、「障害学生」という言葉が本当は前につきます。

ただ、高専というのは中学校を卒業してからですが、合理的配慮というのは、学生が自分でSOSを出したときに提供しなければならないという法的な組み立てになっています。そのSOSを出せるようになるまでは、こちら側が支援しなければいけないというのがあります。そうすると、グレーゾーンの学生を預かることになります。ここに「障害学生」って入れてしまうと、修学支援室が入ってきた時点で、「私は障害者なのか」という問題が出てくるので、意図的に取っています。この3つのところで、支援を始めるようになりました。

教務部、学生部、寮務部は、主事という管理職となる人たちがやっていて、こちらは室長という、管理職でない人がやっているのです。力の不均衡がありまして、こちら辺の話合いがうまくいかないということがよく起きていました。

修学支援室って合理的配慮ですから、教務部に強く影響するわけです。「授業の展開方法や、その学生には合理的配慮に伴うサービスを提供してください」という話になると、場合によると、教務規則に関係します。例えば成績資料の提出締切りを、「合理的配慮に基づいて、この学生にはこういう特性があるので、少し締切りを延ばしてください」等の話合いを行わなければいけない場面が、各所で出てきます。

ADHDの子が寮でうまくやれないとなると、寮務部との話合いが行われることもありました。これを各室長が行うとなると、難しかったという話がありまして、まとめたという形です。

センターを作ると、センター長は学内の組織としては最高意思決定委員会に出席できるレベルのところまでは上がります。センターの中に、この3室を機関として置くという形を取り、基本的に、このセンター長は副校長が兼ねるというような形を取りました。

こうすることで、同じ話合いのテーブルに乗ることができます。これは、けんかをすることではなくて、スムーズに意思疎通が図れるようになり、同じ会議の場に出ることができることにより建設的な話ができるようになっていきます。

それから、この3つの室が1つのセンターにまとまることで、ここのそれぞれが抱えていた、スクールカウンセラーやソーシャルワーカー、進路指導員が、連携して動けるようになったことが非常に大きいです。

これ、全く別のサービスを提供しているように一見見えますが、コアな対象になる学生というのは、この3室全部に関わるような形になります。

合理的配慮が必要な子供に関しては、合理的配慮を伴った就職支援が当然、必要になってきますし、その子が二次障害を起こしていれば、発覚するのは学生相談室からみたいになりますので、この3室というのは、かなり連携を強く取らないと、難しい学生に対応できませんでした。今は、情報交換を月1回の会議で頻繁に行われるようになっているので、スムーズにお互い連携できるようになったと思います。

私からの説明は以上です。

(仙波教務主事)

それでは引き続きまして、私、教務主事の仙波のほうから、アントレプレナーシップ教育の展開について、話題提供をさせていただきます。

アントレプレナーシップ教育につきましては、文部科学省が推進しております、スタートアップ教育環境整備事業にのっとり、全国の高専が取り組んでいる企画になります。

この事業の狙いは3つありまして、1つ目が、学生が起業に必要なマインドを向上させて、起業をすることも卒業後の進路の選択肢になるということを視野に入れることができるということです。今年の当初の段階では、多くの学生は、起業というのを卒業後の進路に選んでいなかった状況でございます。そういう状況を、起業の可能性もあるのだなというふうに学生に理解をしてもらうのが、1つ目の目的になります。

2つ目は、その起業をするために、学生がアイデアをいろいろ出してくるのですが、そのアイデアを実際に、具体的に形にしていくための環境を整備するというのが2つ目です。こちらは、「起業家工房」というふうに名前をつけております。

3つ目は、もし本当に起業をしたい学生がいた場合に、その後押しができるような体制を築くこと。

この3つが、この事業の狙いになっております。

本校では、起業家精神というのを「アントレプレナーシップ」と片仮名で呼ぶ場合もありますけれども、「急激な社会変化を受容して、新たな価値を生み出していく精神」と位置づけています。

言い換えると、起業だけではなくて、既存ビジネスの中で新規事業をつくることや、革新的な技術の開発、地域課題の解決などに発揮できる能力、マインドと言えます。さらに、自らの専門分野の外にいる人たちと関わって、それぞれの得意分野を生かして協働できる力、そういった能力というふうに位置づけております。

非常に簡単に申すと、「自ら課題を発見し、自分事として捉えて解決する」ということです。ということは、全く新しいことではなくて、実を言うと、これまで本校が掲げている、育てるべき人材像そのままであります。

起業というのが何かというのを、新たに学生に伝えていくこと。これで解決できるのではないかなというふうな思いでございます。

計画したことは、学生の失敗への恐怖を取り除くことです。失敗しても学ぶことは多い、まず挑戦してみましょと、挑戦できる機会を提供して、意識づけることに焦点を当てました。

これまでに、もう既に授業として実践してきているプロジェクト学習や地域教育、先ほども地域教育、話題に出ましたが、リサーチワークショップなどの課題解決型の授業がございますので、こういった授業の中でアイデア創出に学生が取り組める活動を推進する。アントレプレナーシップという言葉うまく使いながら、取組をしていくということを計画しました。

さらに、起業家工房としましては、部屋に3Dプリンターや3Dスキャナ、高性能パソコンなど、アイデアを形にできるようなものを準備します。そして、多様な人材と相談したり、意見交換したりできるテレビ会議システムやミーティングスペース、あるいはパーソナルブースの導入を計画しました。

この事業の推進に当たり、予算はおおよそ8,000万円となっております。この1年で使い切らないといけない予算となっております。

その予算配分ですが、先ほど紹介しました起業家工房を、まずは設置するということで、



機材が必要になりますので、それに3,000万円ほど充てます。

また、学生がアイデアを、自由に、いつでもどこでもアイデアをまとめることができるように、モバイル型のノートPCを、購入しようかと考えております。本校、まだBYODが実現できていませんので、学校側でどうしてもパソコンを用意しないといけません。

なお、どこでもプレゼンができるように小型の持ち運び可能なプロジェクターなどの設備を準備しました。

あとは実際に、それらの物を使いながら、いろいろな自作、学生のアイデアを形にしていくための消耗品の経費として、各学科に予算配分しました。

やはり授業としても、知識注入も必要になりますので、アントレプレナーシップを学ぶことができるオンデマンドコンテンツ、ビデオ教材を作成しようと考え、コンテンツの作成を進めているところです。

また、後ほど紹介しますが、FDを行う計画をしております。

基本的には、今年1年限りのこの貴重な経費なので、できる限り各学科、専門学科5つ、一般科合わせて7学科ありますけれども、それぞれの学科の教育が発展できるように、この予算を分散していくという予算計画を立てて進めております。

全ては紹介できませんので、一例を紹介します。

課題解決型のプロジェクト学習というのがあります。7つのテーマにアントレプレナーシップというのをひもづけまして、実践をしていただきました。

例えば、「3D技術を使ったモノづくりに挑戦してみよう!」、「新しい高齢者向け介護・介助装置を考えてみよう」こういったテーマについては、どちらかという、何かアイデアを出して起業化できそうだなというアントレプレナー教育に直結するテーマかなというふうに捉えることができます。

一方で、「バグバグ食べよう!〜昆虫食の世界〜」、「しゃべっチャイナよ中国語」。こちらについては、何がアントレプレナーにつながるのかなという印象もありますが、こういったテーマでさえ、実はアントレプレナー教育につながってきます。

それを実現するためには、その担当教員がしっかりとアントレプレナーシップ教育を理解して、実際にその取組に工夫を凝らしながら実践していくという姿勢が必要になります。そういった教員の取組こそが本事業での貴重な成果だと、私のほうは期待をしております。

その中の一部の成果ですけれども、宇部市の高校生向けのビジネスプランコンテストに3チームが出展しまして、その中で1チームが一番上の最優秀賞を受賞いたしました。

これが面白いのは、担当の先生は、実は物質工学科の先生です。何をしたかといいますと、マイクロプラスチックのごみで今、海岸や砂浜が汚れています。そういったごみを、ウミガメ型のロボットで正常化していく、そういうロボット開発を提案したというものです。高専らしい発想が評価されたのだと思います。教員は物質工学科所属で、そういうマイクロプラスチックというごみの課題を出していますが、ウミガメ型のロボットを提案したのは、電気工学科の学生です。学科混合の授業になっておりますので、いろいろな学科が専門知識を出しながらアイデア創出をできるという、非常に面白い、楽しい授業になっております。

次は、「トビタテ!留学JAPAN」で留学を経験した学生が、今年度、JETROのコンペティションに挑戦しました。その挑戦を支援した例になります。物質工学科の5年生です。

インドネシアの発酵食品テンペというのがあります。これを大衆化すると、貧困地区の食料難を解決できるのではないかと、そういうビジネスを提案したいということでした。

この学生は、本気で起業を考えているというのを、直接聞いております。今後、宇部市の社会人を対象にしたビジネスプランコンテストに応募する予定です。現在、身近な物質工学科の先生の支援を得て、実際にテンペの栄養分について科学分析を進めているという段階に来ております。こういったサポートをしてくれる先生が増えてきているというのも、本事業の成果だと思っております。

こういった事業を進めていく上で、学生の意識改革をしないといけないため、7月には学生向け

のアントレプレナー講習会を実施し、10月に教員向けにもアントレプレナー講習会を実施しました。こちらでは、実際に、元教員で起業を経験された講師から、いろいろ貴重な実体験のお話を聞くことができました。このような講習会を通して、我々教員の意識改革を促せたものと期待しております。

事後アンケート、字が小さいところですが、左側が教員、右側が学生です。こういう講習会に参加することで、やはり「起業を意識する」「理解が深まった」という回答が多く見られています。

特に、教員については7割以上が、今まで考えてこなかったアントレプレナーシップ教育が高専教育にもやはり必要ではないかと、前向きな意見を回答していただいております。

最後に、まとめとして、今後の展開を紹介させていただきます。

今日紹介しておりますアントレプレナーシップ教育、さらには、今後、人工知能を生かした新たな情報化社会に貢献できるために、数理・AI・データサイエンス等が必要になりますので、こういった力の強い人材の育成に注力していきたいと考えています。

以上です。御清聴ありがとうございました。

(山田議長)

どうも御説明ありがとうございました。

ただいま、大きく3つのテーマについて、ベトナムへの国際協力事業、それから学生支援センターの設置、それからアントレプレナーシップ教育の展開について、情報提供いただいたところでございます。

それでは、川村委員いかがですか。何か御質問等あれば。

(川村委員)

いろいろなことを非常によくやられており、すごいなと思いました。

全然関係ないことですが、教育の関係で、県内企業を我々は代表している立場です。最近、加工や溶接等、昔からある技術についてセミナー等を実施すると、意外と人が集まります。ところが、一方で、先生方はそういう研究をされていなくて、先生を探すのが苦労しているという状況です。

これは意見ですが、我々も県内企業さんは、そういった機械加工等の基礎教育が非常に重要だと思っていますが、どう対応していけばいいかなと苦慮しています。ぜひ高専のほうでも検討していただければと思います。

(仙波教務主事)

我々、リカレント教育と呼んでいるところで、正直、今、リカレントにエフォートを割ける状況ではないというところで、積極的には行うことができていないですが、公開講座等の取組は行っていますので、そういった中に盛り込んで、実際に参加したいという要望を受けながら、計画することはできるかと思いますので、ぜひ、相談窓口はテクノセンターが相談窓口になっていますので、実際に声を聞かせていただければと思います。

(山田議長)

ありがとうございます。私からもよろしいでしょうか。それでは冒頭の、まずベトナムとの関係ですね。高専という、その教育システムを輸出するという冒頭の話についてです。

タイのほうでは実際に、高専という機構を立ち上げるという話もあるようです。谷口先生が、タイの国会等で演説したことが契機となり、物事が進み始めたという話を聞いたことがあります。

例えば、実際にベトナムで、こういう日本の教育システムを立ち上げるときに、さっき内堀先生が御説明されたように、カウンターパートは学生じゃなくて、ここの教員であると。どういう教育カリキュラムを構築していくかということ、やっぱり指導されているわけですよね。

では、逆に人事交流ということで、ベトナムの教員の方を日本にお招きして、こちらのほうで実際に、高専の教育を体験していただくといったそういう取組もされているのでしょうか。



(内堀副校長)

最初は来ていただくことから始めました。

実際に見ていただいて、電気工学科のほうに10か月来ていただいて、電気工学科以外の先生ともいろいろと交流されて、帰っていった人がいます。

(山田議長)

実際に、現場に来て見られると、全然印象が違うと思うので。それは、向こうに戻られてからも進めやすいですね。

日本も一生懸命頑張っていることだと思いますが、ベトナム政府の全面的な協力も大前提としてあるということですか。

(内堀副校長)

大前提としてあります。

基本的に政府の機関が「イエス」って言わない限りは何も動かない世界です。特にベトナムは共産圏ということもありますので、政府の意向が強く出ます。

そこは、学校と同時に話を通していかないと、最終的に上の方でうまくいかず話が潰れてしまう可能性も当然あります。

(山田議長)

こういう制度を持続的に進めていこうとしたときに、実際に、こういう教育システムで育てた学生さんが卒業した後、どういうところに就職していくか。ベトナムの国内の状況からしたら、その出口はしっかり保証されているのでしょうか。その辺、いかがですか。

(内堀副校長)

これが実績ですけれども、今年度の9月時点ですが、日本国内の企業にカオタンから1名、それから、フエから3名、ベトナム国内の日本企業のほうに1名となっています。

これを多いと見るか、少ないと見るかというのは、いろいろと判断基準があるかとは思いますが。

少なくとも、日本の教育機関がその立ち上げに関わって、日本の関係企業に就職できるようになった。これまでは、少なくとも日本国内でゼロでしたので、実績としては上がってきているかなと思います。

ベトナムの国内事情として、これまでの就職に関しては、「卒業したら後は知らない」ということだったらしいです。なので、どういうふうに変更したかというのは、直接的に比べることはなかなか難しいのですが、当然、出口がしっかりしていない限りは、その教育というのはあまり意味がないと思います。特に、高等教育機関に属するような教育というのは、きちんと出口を見据えた教育というのは必要かなと思います。

特に、高専は中核的技術者、創造的技術者というところなので、ここら辺には力を入れているところですよ。

(山田議長)

今、特に、宇部高専さんはベトナムを中心に御活動されているということで、もともとタイや、モンゴルの話もありました。今年で一度終わるというお話もありましたけど。また別の国への展開等、そういった計画もごさいますか。

(内堀副校長)

アフリカのどこか、うわさでは。エジプトはもう決まったのですかね。

(金寺校長)

エジプトですか。いや、これは決まっています。高専全体としては、何かサポートするらしいという、噂を聞きました。

(内堀副校長)

はい。いい話なのか、悪い話なのかよく分かりませんが、他からも引き合いは来ているようです。ただ、高専全体としてのキャパシティというのを、やっぱり機構のほうも考え始めて、文科省も考え始めているようです。

また、輸出はいいのですが、じゃあ、国内の教育に、それはどうフィードバックされているのかというのは、問題意識として当然立ち上がってきています。これは国際協力という名前がついているのですが、国際協力をした後に、本校の学生に、プラスのフィードバックがかかるように、本校としてはこれから力点を変えていくというのを計画しているところです。

いろいろな計画の補正とかがかかってくるところから推測すると、本校だけではなくて、機構全体もそういうほうに、かじを切っているように感じられます。

(山田議長)

そうすると、その他国でのこういう教育システムがうまく稼働し始めた暁には、やはり、学生同士の交流を積極的に進めていこうという、そういう将来的な計画があるということよろしいですか。

(内堀副校長)

考えて、今、計画段階です。

(山田議長)

分かりました。ありがとうございます。

あと、話がまた飛びますが、最後にお話いただいたアントレプレナーの件です。

高専さんも、大学の教員もですけど、やはり、最初はどうしても座学から始まり、受け身の授業

からスタートしていきます。我々が今、大学生に対して一番言っているのは、最初はそういうふうに座学から、高校生と同じような教育からスタートするが、やはり4年生で研究室に配属になり、卒業研究が始まるところから、本当の意味での大学教育が始まる。

高専さんも卒業研究をやられていますが、そこから、本当にその教育が始まります。研究を通じた教育という言い方をよくしますが、アクティブラーニングという言葉でよく使われているかと思います。

アントレプレナーと聞いたときに、どうしても私も古い人間なので、起業家ということが最初にイメージされると、なかなか敷居が高いなと思ってしまいます。

今日は、仙波先生のお話をお伺いして、やはり単なる起業家ではなくて、若い学生さんに新しいことにチャレンジするきっかけをつくるということが、このテーマの本質にあるということを感じました。

単なる起業家ということではなくて、今までにない、教科書に載っていない、学校の先生も教えてくれない、でも、何か新しいことにチャレンジしたいという、そういうきっかけをつくるという意味で、このような取組は非常に重要なのかなと、今日お話を聞いて思ったことでございます。

我々のところにも、「志」道場というのがありまして、いろいろ十分機能しているかどうかは分かりませんが、アントレプレナー教育なるものを、少しはやっております。ぜひ、そういうところをうまく、私たちどもの「志」道場もお使いいただいて、協力できればなというのを感じたところでございます。

また、引き続きよろしくお願いします。

ほかの委員の皆様、いかがでしょうか。よろしいですか。

私たちのほうからは以上でございます。何か宇部高専様のほうから、補足の説明等がありましたらお伺いしたいと思いますけど、いかがでしょうか。

(金寺校長)

特にございませんが、皆さん御存じのように、大学、高専の、特に工学系の学生数というのが、日本は全体で17%しかおらず、医薬を入れても36%ぐらいだということで、どこが工業立国だというような状況です。そういう状況を打破しようということで、先ほどの機能強化、成長分野、グリーン系、情報系を、てこ入れするような形で、結果として、工業系、医薬を入れて、大体半分以上ぐらいにはなるようにしたほうがいいだろうという政府の大方針があります。

先ほどのDXというのがあり、あれは単なる一例ですけれども、学生にとって国際的なグローバルマインドが必要なように、DXマインドというのも、これからはどの学生さんであっても必要だろうということで、政府のほうも、AI戦略2019のほうでは、全ての高等教育機関の全学生がリテラシーレベルを取ってほしいとなっています。

また、一定数の大学・高専についても、ある程度の規模であれば、半分ぐらいの学生さんについては、応用基礎レベルを習得してほしいという大方針があります。

本校教員も覚悟を決めてくださって、大変なカリキュラムの編成作業でしたが、カリキュラムを、練ってもらって、今まさに申請しようと頑張ってくださいしています。

いろいろ、本校教職員はかなり厳しく、忙しい状況ではありますが、今後の学生たちのためには、どうしてもそういうことも考えていかないとはいけません。ひいては、その地域を担ってくれる子供たちですので、皆様方と一緒にまた、随時いろいろ教えていただければありがたいと思っている次第でございます。

(山田議長)

ありがとうございます。委員の皆様、いろんな御意見、ありがとうございました。

それでは、やや予定の時間より早いですが、以上をもちまして、議事を終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

(7) 校長謝辞

本日は長時間にわたりまして、お忙しいところ御審議くださいまして誠にありがとうございます。

今後とも地域の皆様方と連携しながら学生を育てていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

先ほども、申し上げましたが、今後重要になるであろうスタートアップ関連では、宇部市様や企業の皆様方と連携協力し、引き続きお世話になりながら、進めてまいりたいと思っております。

また、研究面でも産業技術センターや山口大学さん、地域の企業の皆様との共同研究等を交えながら、今後とも推進してまいりたいと思っております。

中学校の先生方をはじめ皆様方のおかげで、大変優秀な生徒さん、学生さんが本校に来てくださっているので、それを地域の皆様と一緒に大事に育てて、また地域にお返しできるように日々努力してまいりたいと思っております。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。本日は本当にありがとうございました。

